

# 教学半也

令和8年9月2日

No.9

全ての読者対象

初任者研修・キャリアアップ研修Ⅰ ブロックセッションⅡ

## クロスエイジセッションを通して見えてきたこと

6月23日（火）に、初任者研修とキャリアアップ研修Ⅰのクロスエイジ研修として、「ブロックセッションⅡ」が行われました。ここまでの間に、初任者も5年経験者も、自身の「自己課題」を設定し、その自己課題の解決に向けて実践したことをレポートとして持ち寄り、グループ対話を行いました。授業展開や教材の工夫について、同校種、同学年、同教科であっても人それぞれ違うからこそ、知りたくなって質問したり、自身の授業に取り入れたいことを見つれたり、活発な対話の場となっていました。

### 【参加者の感想】



設定した自己課題に対し、自分一人だと一つの視点からのアプローチしか考えつかず、なかなか課題解決につなげることは難しかった。しかしながらグループの3人の先生方とお話する中で、様々な視点からの意見をいただくことができ、考えたこともないようなアプローチに気付くことができた。（初任者の感想）



5年目の先生方のお話を聞き、自分と同じような悩みを抱えながら日々取り組んでいることを知り、安心しました。経験を積んだ先生でも試行錯誤を重ねていることがわかり、悩みながら成長していくことが大切なのだと感じました。私も一人で抱え込まず、先輩の先生方に相談しながら一つ一つ経験を積んで成長していきたいと思います。（初任者の感想）

「子供の考えの違いを活かした授業」を自己課題に設定されている先生のお話を聞いて、それが大切なことだと気づいた。子どもたちは、考えの違いがきっかけで、自分の考えを伝えたいと思ったり、友達の考えを聞いてみたいと思ったりすると思うので、違いが生じた場面では、立ち止まってじっくり考える授業を行っていきたいと思った。（初任者の感想）

子どもの声をつなげて授業を作ることを頑張っている先生がいました。教科書や教師の言葉よりも、子どもから出てきた言葉が、子どもたちの中で定着したということや、一人の子が説明したことを聞いて、「つまりこういうことか。」と他の子がつなげて話していたということを聞いて、私ももっと子どもの言葉を引き出せるようになりたいと思いました。（5年経験者の感想）

初任の先生や、5年目の先生と対話をして、教員の仕事はやはり大変だけれどやりがいのある仕事だなということを感じました。勤務の年数にかかわらず悩みはあり、どうかしようと日々試行錯誤していることを実践発表で感じ取り、すごく刺激を受けました。初任の先生に話をするために、やってきたことを言語化することで自分が大切にしていることが頭の中で整理されていく感覚がありました。（5年経験者の感想）

参加された先生方の振り返りから、初任者も、5年経験者も、クロスエイジでの対話を通して、自分では気付かなかった新たな視点を獲得することができたことがわかりました。また、それぞれの実践の様子を聞き、お互いに刺激を受け、教師としての在り方について改めて考え、明日からの活力になった様子も見られました。

対話の中で多く見られたのが、「子どもの姿を語り合う」場面でした。具体的な授業での発言、学級での姿を思い浮かべながら語り合い、そこから改めて目の前の子どものためにどんな授業ができるのか、支援の手立てはどうあったら良いかを、共に考えていく姿がありました。

### キラリ★Pick Up

## 子どもが「考えること」を楽しむ授業づくり

～UD・特別支援教育の観点から～

茅野市立湖東小学校の先生方は、学級の誰もが学びに参加し、精いっぱい力を発揮できるように「授業のユニバーサルデザイン化」の観点から授業づくりを行っています。

4年生担任の櫻井ゆかり先生の国語科「夏の楽しみ」の授業では、夏の様子がわかる俳句を作る前段階として、夏を連想する漢字や言葉を班内の仲間と、「せーの」で1つずつ出し合い仲間と一致させる活動を設定していました。子どもたちは、「海」「スイカ」などと夏らしい言葉を考えていました。各班には、ホワイトボードが用意され、子どもたちはそこに夏を連想させる漢字や言葉を書き表し、学級内に共有していました。視覚化することで夏を連想する漢字や言葉に自然と目を向け、主体的に学習に向かうという子どもの意欲を高めていました。

俳句を作る場面では、これまでの生活や授業の中で子どもたちから出てきた夏に関連する言葉を上の句、中の句、下の句ごとに色分けして分類し、タブレット上で自由に組み合わせることができるように手立てが準備されていました。学級の中には、「言葉が思い浮かばない」「どう組み合わせたらいいかわからない」といった困難さを抱えた子どもたちもいましたが、どのお子さんも俳句の完成に向けて、試行錯誤しながら言葉を組み合わせる姿が印象的でした。

本時途中から授業参加したAさんは、俳句を作る場面で隣の席のBさんに「どうやって作ればいいの？」と質問しました。するとBさんは、「まず黄色のところから言葉を選んで、次に青から、そして最後にピンクの中から言葉を選ぶんだよ」と色を使って組み合わせ方を伝えていました。色分けされた言葉カードは、組み合わせ方の手順を分かりやすくするだけでなく、子ども同士が教え合う際の共通の手掛かりにもなっていました。



### 【キラリポイント！】～授業の山場を支える「事前の手立て」～

櫻井先生の授業では、「焦点化」された授業の山場（俳句を作る場面）に向けて、言葉遊びを通して子どもたちの夏の言葉のイメージを広げる工夫がされていました。ゲーム性を付加することで、子どもたちがより授業に引き込まれ、授業が活発化する様子が見られました。

特筆すべきは、授業中の櫻井先生からの指示や説明が最小限に抑えられ、子どもたちの考える時間が保証されていました。授業の随所に「視覚化」された手立ての工夫や、考えたことの「共有化」がちりばめられていたことにより、子どもたちがスムーズに夏の言葉をイメージすることができるのと同時に、本時何をするべきなのかが明確となっていました。イメージを広げる活動と創作を支える環境を段階的に整えることで誰もが学びに参加しやすい授業となっていたのではないのでしょうか。